

英語を通して日本語を考える 日本語を通して英語を考える

ロバート キャンベル

(日本文学研究者)

ニューヨークのブルックスで生まれ育った少年は、やがて「日本文学者ロバート キャンベル」と日本語で表記されるようになった。外国語として出会った日本語について母語である英語を通して考え、さらに日本語を通して英語を考える。その思惟の経験から生まれた「外国語観」と「母語観」とは？

私が英語以外の外国語に触れたのは、まずは生まれ育ったニューヨークのブルックスの古いアパートメントでした。ユダヤ系、イタリア系、プエルトリコから来たヒスパニック系など、いろいろな人がいろいろな言葉を使って生きていました。階段の踊り場ごとに違う言葉が聞こえてくるので、英語だけを話していれば事足りるという環境ではなかったのです。

アパートでのコミュニケーションは言葉の範疇にとどまらず、英語がまったくできないドイツ系のおじいさんとは窓から飴玉を投げてもらうのが挨拶がわりでした。

中学生だった二四、五歳の頃にはヨーロッパで暮らしていたので、ここでもいろいろな言葉に接している状態でした。イディッシュ語(中欧・東欧系のユダヤ人の言語)などに触れたのもこの頃です。

日本語という外国語との出会い

日本語との出会いは一九歳、大学の授業で選んだときです。この出会いについてよく質問を受けますが、劇的なきっかけがあったわけではないのです。すでにフランス語は勉強をしていて、かなりのレベルでしゃべることができました。日本語がなんとなくカッコよく見えたのです。日本の文学や映画に興味をもつようになっていくのはその後でした。

日本語を勉強することにしたけれど適性がなければやめればいい……という程度の思いで始めたのです。勉強するうちに「日本語を学ぶことで自分は何になれるのか?」「日本語を使うことで自分は何ができるのか?」という思いが芽生え、強くなっていきました。

語学の勉強、習得はスポーツや楽器と似ているところがあります。時間などのコストをかけることがどうしても必要になります。コストをかけないと上達は望めません。私の場合も相当のコストをかけたので「やめればいい」とは言うことができなくなっていました。

語学としての授業だけでなく大学のアーカイヴに所蔵されていた黒澤明の映画や第二次世界大戦中の日本のフィルムなどを見たり、俳優さ

ん、女優さんの名前を覚えたりしながら、日本語のない世界へのリターンができなくなってしまうのです。

日本語は論理的でない!?

そして日本(大学時代に一年間、東京に、そして一九八五年、九州大学に)に留学するわけです。ネイティブの日本語話者と日本語でコミュニケーションをするようになるのですが、とまどったのは「論理的でない」とは言い切ってしまうことのできない日本語独特の論理性でした。

英語と日本語を比較していたというか、英語を通して日本語を見ていたのだと思います。日本語は文法としてこの表現が的確なのか、的確でないのかを説明するのが難しいのが特徴です。英語は文法として分析が可能、というよりその

ような訓練を義務教育の中で受けています。そういうわけで、説明も可能です。

敬語を含む「待遇表現」に論理的な文法構造がないことにも苦労しました。しかし、それ以前に物の数えかたなどに頭を悩ませていました。



とまどったのは「論理的でない」とは言い切ってしまうことのできない日本語独特の論理性でした。

「高度経済成長」といった難しいような言葉は使えるのですが、皿は一枚、ビールは一杯……と日本語で数えることがなかなかできないのです。そのルールがわかりませんでした。

英語の場合は one dish や one glass of beer のように、すべて one です。単純というか規則的です。

いろいろと言い間違えたり、わからなくなったりする度に周りにいる人に聞いてみるのですが、ルールという形で説明してくれる人はいませんでした。

二文字の並びや繰り返しにもルールが見つけれませんでした。

ただ「こわごわ(怖怖)」であって「こわこわ」ではない。「ごわごわ」では物がなめらかではないイメージになってしまう。

「しわしわ(皺皺)」と言うけれど「しわじわ」とは言わない。「じわじわ」はまた別の意味になってしまう。

「なんで、『しわじわ』と言わないのか?」と聞いてみたことがあります。

「言わないね」と言われただけで、論理的な説明はされませんでした。

「こわごわ(怖怖)」を「ごわごわ」と言ったり、